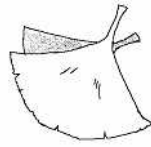


通信小海

たとい地は変わり、山々が海の真中に移ろうとも



牧師 水草修治

ほんの数年前まで、世界唯一のスーパー・パワーだとか世界の警察だとか、パックス・アメリカーナとかいって、誇らしげに胸を張っていた米国が、のしかかるイラク・アフガンの戦費とサブプライム・ローンに端を発する金融恐慌で今にも倒れそうである。何人かの政治評論家によれば、今や世界はアメリカ一極ではなく、EU・ロシア・中国・インド等が覇を争う多極化に向かって急速に変化しつつあるそうである。わが国の首相はあいかわらず米国一辺倒で行けるのだと信じてい

△今月の御言葉△

「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。」

詩篇四十六：一

るようであるが、その首相自身大晦日には、その座にあるかどうかあやしい。米国はまもなく大統領選挙であるが、感心するのはこんなポロポロにされた国でも次期大統領になりたいという人がいるということである。なんだか導火線に火がついたダイナマイトをばいと投げ渡されるみたいな状況ではないか。

こんな慌しい世界の動きをみると、ほんとうに十年後、いや三年後、いや二年後、一年後だつてこの世界とこの国がどうなっているのか、見当もつかない。政治や経済だけではない。本紙でもずっと話題にしてきた地球温暖化問題にしても、急ピッチで対策を講じなければ取り返しがつかない現実があるのに、諸国はおのれの利益にしがみついている。また、三百年の歴史を誇った幕府に引導を渡したマグニチュード8の安政大地震からすでに一五四年がたっている。地震地質

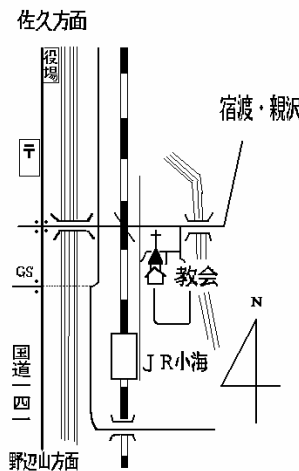
日本同盟基督教団小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七

〒三八四一一 二二 二六七九二四七七六

〒振替005300 61683

見晴台の教会へどうぞ



集会あんない

日曜日 朝礼拝 午前十時から十一時半

夕礼拝 午後八時から九時

*海尻・川上・南相木・甲斐大泉で毎月家庭集会をしています。

*個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

学者によれば、東海地震の周期は一一〇年から一五〇年だというから、今日明日、超巨大地震が静岡県の浜岡原発を襲つてもおかしくない。原発震災になれば、関東圏は六、七時間でチェルノブイリ化する。浜岡原発停止を訴える署名は九十五万筆に上っているが政府も中電も動くとはしない。これでは列島がさきに揺れ動く。

こんなことばかり考えていると不安になつて夜も寝られないんじゃないですかと言われそうだが、毎日ぐっすり眠つて楽しく過ごしていられるのだから不思議である。一つには、そもそも人間が造つた物でたしかなものなど何もありません。ただということ聖書から知っているからだろうか。

もう一つは、すべてのものが揺れ動いても、けつして揺れ動かないたしかなお方がいつしよにいてくださるからである。また主イエスを信じれば、死んだつて行く先は至福の天国である。

「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。それゆえ、われらは恐れぬ。」

たとい、地は変わり山々が海のまなかに移るつとも。

たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだつても、その水かさが増して山々が揺れ動いても、川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。

神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。

国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ。神が御声を発せられると、地は溶けた。万軍の【主】はわれらとともにおられる。ヤコブの神はわれらのとりである。」

詩篇四六篇



海尻で家庭集米会

十月十七日(金)午後七時三十分から
井出博彦さん宅で。 96 2534

南相木で家庭集米会

十月二十九日(水)午後二時から

日向の中島悦子さん宅です。どなたもどうぞ。 78 2047

信州から野宿者支援

第九回 収穫感謝祭・『ひびき』読者交流会のお知らせ

短い山の秋の終わりに、人影が途絶えた小さな湖のほとりで開く昼食会です。

日時 十一月一日(土) 正午から午後2時

場所 松原「フィンランド・ヴィレッジ」前

広場(長湖畔、小海町音楽堂隣り)
ちよう

参加費 1人500円(高校生以下は無料)

送付先 小海キリスト教会にお持ちくださるか、

南牧村社協へ。

〒384-1302 南牧村大字海ノ口966 1

5 南牧村社会福祉協議会気付 山谷農場

*着払いによる送付はご遠慮ください。荷札に「木曜午後送付希望」とお書きください。

山谷農場事務局(藤田 寛) 小海町芦谷ヒルサイドコーポ一 二号室毎週金曜土曜はあります。

電話 090・1436・6334

ファクス 042・786・2088

メール nyoro@beige.ocn.ne.jp

カンパ振替 一四 四五三七九六

見守っていてくださる方



「ハガルが私に対して、こんなに横柄にふるまうのは、あなたがハガルを甘やかしたからです。」

サライは夫アブラムに対して抗議した。ハガルというのは、不妊の妻サライが、当時のオリエントの習慣にしたがって、夫に「借り腹」として与えた自分の女奴隷であった。ところがハガルは自分が主人の子をみこもつたと知ると、女主人サライをばかにするようになった。彼女はつぶやいた。「なにさ。ご主人のお子をたつた一人もみこもることもできないで、サライ様など何が女主人よ。」

そういうハガルの横柄な思ひは、日に日に言動のはしはしに現れるようになっていく。これみよがしに大きな腹をつきだして、ま

るで自分が正妻であるかのようにアブラムにすり寄って甘えているのを見ては、サライが平静な心でいられるわけがなかった。

サライが毎日毎日、ハガルのことを愚痴るのを聞いて、夫はため息をついて投げ出すように言った。「あれはもともとおまえの女中ではないか。おまえの好きなようにすればいいさ。」

夫から許可を得たサライは、日本風にいえば、ハガルの箸の上げ下ろしにまでネチネチと小言をいうようになった。いぎたないの、食事のマナーがなっていないの、目つきが悪いの、言葉遣いが下品だの、着物がはでだの、いや地味すぎるだのと指摘した。ハガルが少しでも不満げな顔を見ると、「そんなことでわが一族の長の子を産むにふさわしい女といえると思っっているの？」と手厳しい。

ある日とうとうハガルはこらえられなくなった。そして、家を飛び出して荒野に來てしまった。しかし、女奴隷の身である、帰る実家などありはしない。シウルへの道のほりにある泉のほとりにたたずんでいた水面にはおなかをかかえた妊婦の姿が映っている。彼女は途方に暮れた。つらい仕打ちに

思いあまつて飛び出しては来たものの、身を寄せるあてもない現実に今さら気づいたのである。すると主の御声があった。「サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから來て、どこへ行くのか。」

ハガルは答える。「あたしの女主人サライから逃げているところです。」

どこから來たか、彼女は答えることができなかつたが、どこへ行くのかについては皆目見当がつかない。逃げの人生はこんなものである。砂漠で孤立すればさほど時を経ずして干からびてむくろになってしまつたろう。

すると主は言われた。「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい。」

ハガルは主のことばにしたがつて女主人の元に帰つた。彼女の顔は変わつていた。眉間のしわは消え、高慢なもの言いも変わった。なにか環境が変わつたわけではない。ただ神はハガルに自分のおるべき分を思い出させてくださったのである。おるべき分に落ち着いたとき、平安が戻つてきた。それに彼女は日々自分のような者をも見守つていてくださる神を知つたのである。

子どもが先生



イエスにさわっていただくこうとして、人々がその幼子たちを、みもとに連れて来た。ところが、弟子たちがそれを見てしかった。しかしイエスは、幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。

「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」

ルカ福音書十八章十五 十七

「先生はお忙しいのだ。子どもなど連れてくるんじゃない。」弟子たちは、そんなふうに通って、イエス様のもとにやってきた親子連れを叱りつけました。たしかにこの頃にな

るとイエス様は都エルサレムに向かつて決死の覚悟で歩を進めていらしたので、弟子たちの言い分もわからなくはありません。

けれども、イエス様は逆に弟子たちに厳しくおっしゃいました。「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。」つまり、イエス様に言わせれば、「偉そうに子どもたちをわたしから遠ざけようとする君たちは、いったい何者なのだ。わたしの弟子だからというので、自分分は神の国に当然はいることができるのだと思いがつてはいけません。この子どもたちこそ神の国にふさわしい者たちなのだ。むしろ、子どもたちに邪険にする君たちは、子どもを先生として学ぶべきだ。」ということなのです。

弟子たちは驚いたにちがいません。確かに俺たちはイエス様の最初ツからの弟子だから、神の国の代表格だと、少々天狗になっていたからです。ところが、なんと神の国にはいることもおぼつかない。この子どもたちのほうが先生だと言われて

しまったのですから。

イエス様は子どもには罪がない天使だとおっしゃるのではありません。子どもも嘘をついたり、弱い者いじめをしたり、小さな盗みをしたり、残酷なことをしたりするものです。子どもにも罪があります。では、どういつ点で子どもは神の国にふさわしいのでしょうか。それは偽善のなさ、率直さです。子どもには偽善的にふるまう知恵もないからです。

大人に「あなたは嘘をついたことがありますか。うそつきは地獄に落ちます。」といえば、「この程度の嘘は誰でもついている。」とか「地獄なんてほんとにあるのか」と言っておまかします。でも子どもに「君は人に意地悪したことがあるでしょう。それは罪だよ。そのままだと地獄に落ちるよ。」と言えば、「子どもは」「ごめんなさい。ぼくは地獄に落ちたくない。」と答えます。さらに、その子に「イエス様はきみのその罪のために、身代わりに十字架で死んでくださったんだよ。神様におわびして、イエス様を信じれば君は天国にいけるんだよ。」と教えれば、子どもは「うん。ぼく神様にあやまってイエス様を信じる。」と答えます。この素直な信仰が大人の学ぶべき模範なのです。